マゾNTRマスト
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ハネムーンのためにお金を貯めた。
全部、Sな彼女とエーゲ海に行くためのお金。
彼女の笑顔さえ見られるのなら…。
そう思ってお金を貯めた。

しかし僕を待っていたのは、彼女の笑顔だけではなく。
見知らぬ金髪美女。

「男なら、これで勝負でしょ？」

金髪美女はさも当たり前のように、服を脱ぎ捨てた。
彼女もそれに従い、全てを脱ぐ。
僕はどうして良いか分からず、ただただ立ち尽くしていたが、
なんだか負けたくないという気持ちが湧いてきて、
とりあえず全裸になった。

僕が裸になって、彼女が全裸になって、金髪美女が全裸になって。
そうしてようやく僕は、金髪美女がいう
『これで勝負』の意味がわかった。

つまり、こういうことだったんだ。

「うっそ！　マジ？　マジでこのサイズなの？
チ〇コ小さいとかそんなレベルじゃないじゃん。
見なよ。王女様のお〇ポ！
極太で超反り返ってるでしょ？
あれがお〇ポっていうものなのよ。
アンタのは、ただの〝オマケ〟じゃん（笑）」

金髪美女はフフンと鼻を鳴らすと、
勝ち誇ったように顎を前に突き出し、目を細めて笑った。
僕は殴ってやろうと思ったけど、自分と相手の体格差を見て
諦めた。
『喧嘩でも勝てそうにない』
そう思ったからだ。
自然と俯いてしまって、彼女の笑い声が心に突き刺さる。

喧嘩でも勝てそうにない圧倒的な体格差。
女の立場で見たらどっちを選ぶか明確に分かるおチ〇ポサイズ。
そして何よりも女性が尊ぶ「自信の滲み出た顔つき」。
金髪美女の持っているソレラに、僕は何一つ勝てない。
そう思ったら、急に恥ずかしくなってきて…。
おチ〇ポが少しだけビクンって揺れた。

「あれあれあれ～～？？？
どうしたのぉ～？
急に大人しくなっちゃって。
しかもおチ○ポ今、ピクンってなったよね？？？
何？　感じちゃったわけ？
『僕、今負けてるううう』とか思ってるの？
ぷぷぷっ。
超ダサーい。
自分でもそう思うでしょ？？？」
負けだね？
認めちゃいなよー。
ねぇねぇ（笑）
ヘヘン（笑）

彼女がエーゲ海への旅行にこだわったのは、きっとこの為。
つまり、僕をこの金髪美女に会わせる為。
そして僕に認めさせるつもりだったのだ。
彼女と金髪美女の関係を…。

「ああ、紹介が遅れたわね。
彼女は私のビアン仲間。
私達いわゆるレズビアンなの。
彼女、おチ○ポついてるけどれっきとした女よ。
勘違いしないでね。
アンタのことは法的にも結婚した仲だし、嫌いじゃないわ。
でも、それは男としてじゃない。
奴隷のマゾヒストとして嫌いじゃないってこと。
分かるわね？」

彼女はなんの遠慮もなく、しれっと…。
僕にそう告白した。
僕は金髪美女の前で奴隷と紹介された恥ずかしさと、敗北感で胸が一杯だった。

今まで感じたことのない寒さを感じた。
きっとこれが、孤独感なのだろう。
孤独感で、ついつい下半身に血が集まってゆくのが自分でも分かった。

「ジェミーよ。これからはミホ同様に、私にもご奉仕してもらうから。よろしくね？」
「ジェミーはね。この国の王女様なの。逆らったりしたら、その場で首を切り落とされちゃうかもよ？クスクス」
ガクガク
ビクン！
ビクン！
ガクガク
ガクガク
乳首勃ってるぅ！怖いのかなぁ（笑）

意外にも金髪美女は流暢な日本語を話した。
しかも、この国の王女様。
確かに観光パンフレットに載っていた女性とよく似ている。
僕はどう返事をしてよいか分からず、
ジェニーの大きなおチ〇ポを見つめながら
ただただ、黙っていることしか出来なかった。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。
我が国では死刑は廃止されているもの。
何か他に罰を考えるわ。
でも、そんなことより貴方…。
さっきから、私のおチ○ポから
目が離せなくなってるじゃない。
いいのよ。
『奴隷にしてください』って言えたら、
おしゃぶりさせてあげても…♥」

ガクガク
ビクンっ！
ビクンビクン
ガクガク
ガクガク
ビクンっ
キャハハハ
マジで情けないね～？
貴方、精神もヒヨワなのね。
クスクス

断れなかった。
別に王女様のおチ〇ポを
しゃぶりたかったわけじゃない。
ただ…、
僕にとっては最愛のご主人様である彼女の…
目がとてもキラキラしていて、とても断れる状況じゃなかった。

僕には…、
「奴隷にして下さい」
そう言うしか無かった。

その言葉を口にした瞬間、
全身に悪寒とおぞましさが駆け巡る。
僕は、今とんでもないことをしてしまった。
そう思った。

でも…、もう逃げられない。

「あはっ！
ね？言ったでしょ？ジェミー。
すぐに堕ちるって…（笑）」
「すんなり堕ちたわね。
じゃあ、奴隷らしくしないとね。
まずは日本語でいいから奴隷宣誓書を書きなさい。
その小さなお○ポで拇印押してよ。
それから勃起も射精も出来ないように
貞操帯を嵌めてもらうわよ」
ふ～ふ～
ぷるんっ
ぷるんっ
やっぱマゾね～。
超ザコ（笑）
見てすぐにわかったわ。
そのお○ポは、
マゾのオナニー専用だって。

おチ〇ポで拇印を押した奴隷宣誓書。
ビアン主様（※）による貞操帯調教。
その言葉だけでおチ〇ポがビクンビクンしてしまう。
これから自分がされることを考えると
おチ〇ポが固く膨れ上がり、破裂しそうになる。
辛くて、辛くて、辛くて……。
悲しい幸せを…感じてしまった。

※ビアン主様
＝レズビアンのカップル両名がご主人様の場合の尊称。

「やだ！さっきよりもおチ〇ポビクンビクンしてるっ！」
「何、感じてるのよ。
ホント、マゾって最低ね。
さっさと奴隷宣誓書を書きなさい。
話はそれからよ」
ブルブル
ブルブル
ブルブル
ビクン
ビクン
ビクン
出てってくれる？
外で宣誓書を書いてよ。
私達、今からSEXするんだからさ。

僕は廊下に、全裸のまま追い出された。

そして、氷が敷き詰められた洗面器を彼女から手渡される。

「これは何？」

そう聞く前に何に使うものだか分かった。

『勃起したおチ〇ポを突っ込んで、冷やすもの』

勃起おチ〇ポは氷で冷やすと強制的に萎む。

萎んだら、自分で貞操帯を嵌めろ。

そういう意味だ。

『貞操帯の前に奴隷宣誓書。
そのおチ〇ポで拇印を押すんでしょ？
忘れないでね？』

「・・・はい」

彼女はそう言うと紙とペン、それから男性用の貞操帯を廊下に放り捨てて、ドアの鍵をかけた。

それから2時間近く、僕は全裸のままホテルの廊下で一人立ち尽くしていた。

一応、奴隷宣誓書も貞操帯も言われた通りにした。

2時間も立たされたおかげで、

僕は外人客に裸を見られ、クスクスと笑われた。

ようやく部屋に入れてもらえた時には、
二人は十分に楽しんだ後だったようで
僕は、その後処理を命じられた。
つまりは、王女様のペニスを口で…。

「よう、待ちぼうけはどうだった？
おら、咥えろよ。ご希望だろ。
根本までしっかり飲み込んでもらおうか」
「奴隷宣誓書はこっち頂戴。
やだ、マジでチ○コで拇印を押したんだ？
ちっちゃい印鑑だこと（笑）」
SEX後のジェニーって
男言葉になるのよねー。
一応王女だし、普段のは演技。
こっちが本当なんだよ（笑）
ガシッ

「えーっとなになに？
・一切口答えしません。
・許可なしでオナニーしません。
（アナニー・乳首オナニー含む）
・常に王女様とミホ様に最上位の敬意を払います。
・空気を読んで、行動します。
（言われなくても自分から奉仕します）
・事後は、お掃除フェラ・お掃除クンニを必ずいたします。
ふーん？アンタ、これ守れるの？」
やだ～。汚～い（笑）
舐めとったカスも飲み込めよ。
苦くて旨いだろ？
ゴクっ！

「守れるよなぁ？
守らないと、ミホのそばにいられないものなぁ？
ほらっ！
もっと舌を使って亀頭を舐めろよ。
そこに精液がこびりついてんだろ？
あっ！今逃げようとしたろ。
はい、罰決定。
良いと言うまでこの足は外さねぇから。
分かったな？マゾ」

厳し～（笑）
クスクス

問
女の～それも女の私の男根を
咽喉「ノド」まで突っ込まれた気分はどうだ？
んん？

ゴクっ！
ゴクっ！
ビクッ！
ぐいっ！

「へっ！
ジェミー、コイツ超ヘタレだよ？すぐ泣きを入れるし。
大体この奴隷宣誓書だって、コイツが書いたのは名前と
拇印の部分だけでしょ？
内容はジェミーが書いたんだし（笑）。
ま、コイツはこんな文章書く能力なんて無いんだろうけどさ」
バカだし、
分からないんじゃない？
ってー？
綺麗に舐めるんだぞ？
分かってんのか？
ゴクッ！
ちゅ。
んちゅ。

「ああ、そうそう。
貞操帯の鍵をよこしなさい。
私には完全服従してるから問題ないけど、
ジェミーにはまだ心の底からは服従してないでしょ？
だったら鍵はジェミーに預かってもらいましょ。
オナニーしたくなったらジェミーにオネダリするのよ。
いいわね？」

「射精した後って、どうしようもなくおしっこしたくなる時有るだろ？なんかさ、今がまさにその時なんだわ。とりあえず、飲んでくれる？私、1回で相当出すから零さず最後まで飲めよ。零したらオナ禁期間伸ばすから。いいな？」
ちゃんと飲めなかったよ。クスクス
マジでやったよコイツ(笑)
ちゅうう〜〜っ
びくっ！

しゃぁぁぁ

結局僕は、精液混じりのオシッコを1リットル近く飲まされた。
貞操帯の鍵は王女様に預かられ、完全に逃げ場も無い。

王女様は公務があるらしく先にお城に帰ることになったが、
その際彼女に『乗馬』を薦めているようだった。
僕は
『自分が馬になるのなら、彼女のお尻の感覚を背中に感じられる
と内心喜んでいたが、期待は無駄に終わった。
彼女は本物の馬に乗ったからだ。
一方、僕には別の仕事が与えられた。

まずは背中への彫り物。
彼女が乗馬を楽しんでいる間、背中に指定された文字を
お店で彫ってもらわなければならなかった。

そして彼女が乗馬を終えたら、泥で汚れたブーツへの…

体験版はここまでです。
残りは本編でお楽しみ下さい。